
原初の弟

浅葱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

原初の弟

【Nコード】

N3546V

【作者名】

浅葱

【あらすじ】

魔法と科学を混在させるシステムが存在する世界。事象をその手に、幻想を現実。そのすべては、原初と呼ばれるものから始まった。それは生命であり、干渉であり、破壊だった。俺は、原初の弟である。

EPISODE・0 プロローグ（前書き）

書きたかったんです…！それはまるで少女のように。が行き詰った
のもあるんですけど、別ジャンルが書きたかったんです…！初めて
書きます、異能モノ！行き当たりばったり感満載なわけですが、こ
ちらもよろしければ読んでいただけると嬉しく思います！

EPISODE・0 プロローグ

雨の音が遠くに聞こえる。それは今なお、この身を激しく打ち続けているのに。

「…よくやったな。T・system/Name『原初の者』。」

後ろから、聞きなれた男の声がした。それは、任務完了の合図。いや、実験成功の祝砲か。

私の足元には、大量の血溜まりと無数の人であったモノ。夥しい返り血は、ほとんどを雨に攫われた。

初めての運用。初めての起動。なんの感慨もない。ただ、この現状がデータにあった地獄というワードとよく似ているな、とだけ感じていた。

肉を断つ。

骨を砕く。

内臓を抉る。

命を奪う。

命を奪うことが、殺し続けることが、私の存在価値ならば。何故この人たちは私に殺されなければいけなかったのだろうか。

凪いだ心も、どれほどの攻撃を受けたかは知らないが、痛まない体も。どれだけの命を奪うために作られたのだろうか。

「初実験でこの結果は素晴らしい。これならば確実に、××として

の運用を認められるだろう。」

軽い足取りで、男は私に満足気に言った。

ナイフが空を切る音が男の耳に届いた頃には、男の喉元から鮮血が飛んでいたことだろう。

「！……っが！な、ぜ……。」

男は膝から崩れ落ち、そのまま動かなくなった。

何故？だなんて、可笑しなことを言う。そうやって作ったのは、貴方なのに。『疑問を持つな』と言ったのも貴方なのに。

でも、何故殺すのだろう。何故私は作られたのだろう。何故、何故、何故？

「私は、何なのだろう……。」

持ってしまった疑問に、答えてくれるモノなどここにはいない。

ここには、私という存在がただ立っているだけだ。だから、

「ごめん、お父さん

」

この懺悔を許すモノもない。

EPISODE・0 プロローグ（後書き）

さて、まずはプロローグなわけですが。作中に出てくるシステムの名前、実は適当だったりします。まったく意味がないわけではないのですが、いい名前が思いつかなかったというのが最大の理由です。よろしければ、なのですが…こんな名前はいかが？という案がありましたら是非！

EPISODE・1 初めての朝、始まりの夜、いつもの朝（前書き）

連続投稿となります。初めのほうは、わざと改行や段落をつけていません。読みにくくて嫌だなと感じる方には、おすすめ出来ないかと思えます。

EPISODE・1 初めての朝、始まりの夜、いつもの朝

そこには、男があつた。清潔感などとは無縁の、酷く汚れた男だつた。男は、科学者だつた。煤にまみれてはいたが、白衣を着ていた。男は、一つの大きなフラスコの前に立っていた。その周りには、溶岩のようなものやヘドロのようなものたちが、あーあーと呻いていた。男はそれに興味も示さなかつた。男の視線にあるのは、大きなフラスコだけだつた。いや、フラスコではない。その中身、黄緑色の液体の中に浮かぶ少年だつた。少年は裸だつた。その四肢には大量の管がくつついていた。いいや、刺さっていたというのが正しいかもしれない。少年は目を覚ました。怠惰な速度で目を覚ました。それはまるで、朝日に起きた朝の一幕のようだつた。男は歓喜した。少年の目覚めに歓喜した。少年は言った。フラスコの中で。「おはよう、お父さん。」男は再び歓喜した。少年に言った。「ああ、おはよう。いい朝だね。」男の腕時計は、壊れていた。今が何時で、何曜日で、何月で、何年かなんてわかりはしなかつた。それでも、男にとっては朝だつた。初めての、朝だつた。少年は管を引き千切つた。少年はフラスコを砕いた。少年は外を知つた。少年は空気を吸つた。空気が濺んでいた。少年にそんなことは、わからなかつた。男は少年を抱きしめた。少年は男の肩越しに、溶岩のようなものやヘドロのようなものと目が合った。少年は尋ねた。「あれは何?」と。男は答えた。「疑問を持つてはいけないよ。」少年は再び尋ねた。「何故疑問を持つてはいけないの?」男は再び答えた。「必要がないからさ。」少年は頷いた。必要ないなら仕方がないと。二人は、二人きりの生活を始めた。あーあーと響く部屋で、少年は幸せだつた。とても幸せだつた。男も幸せだつた。でも、まだ足りなかつた。二人は遊んだ。たくさん遊んだ。男は少年の為に、薬を作つ

た。少年は男の為に、体を差し出した。毎日毎日、そうやって二人は遊んだ。月日は流れた。短いような長いような。そんな月日が、いつの間にか流れた。少年は、相変わらず幸せだった。男も、とりあえずは幸せだった。ある日、男が一人で出かけてしまった。「けっしてここから出てはいけないよ。怖い人たちが、お前を食べに来ってしまうからね。」少年は強く首を縦に振った。男の言うことに間違いはない。食べられてしまうのは、きつと怖い。少年はその日、ずっと一人きりだった。少年は一人で遊ぶことにした。男が置いていった、素敵な薬で遊んでみた。何だか、男と遊んでいるようで楽しかった。「ねえ。」と声がした。少年の足元だった。そこにあったのは、頭は一つで体は三つのミミズだった。少年はそれを見つめても辛いんだ。寒いんだ。とつても寒いんだ。「少年は答えた。「辛くないよ。寒くもない。」ミミズは言った。「君はおかしいよ。とつてもおかしいよ。」少年にはわからなかった。おかしいなんて思ったこともなかったから。少年は子供だった。大人だった。老人だった。赤ん坊でもあった。だからわからなかった。ミミズは続けた。「君は変だよ。とつても変だよ。君は悲しいよ。とつても悲しいよ。君は辛くて、寒くて、おかしくて、変で、悲しいよ。とつても、とつても。」少年が「何故？」って問いかけようと、口を開こうとしたときだった。ミミズは汚れた靴に、ぐちゃりと踏まれて潰れてしまった。少年は言った。「おかえり、お父さん。」男は言った。「ただいま。」そして続けた。「疑問を持つてはいけないよ。必要がないからね。」少年は頷いた。「必要がないなら仕方がないね。」と頷いた。でも少年の頭には、あのミミズの言葉が響いていた。それからの月日は、あまり流れはしなかった。男はある日少年に言った。「今からお祭りに行こう。」少年は何も言わずに、男について行った。お祭りには、たくさんの方がいた。少年は男と自分以外の人を初めてみたから、とつても驚いた。男は少年に教えてくれた。「やつらを殺しておいで。それがお祭りさ。」少年は言いつ

けどおりに殺し始めた。いともたやすく死んでいった。少年は、ミズのことを思い出していた。あっけなく潰れた、ミミズの言葉を思い出していた。少年は幸せだったのだろうか。疑問を持った。男は幸せだった。この上なく、幸せだった。全てが終わり、雨が降った。血を洗い流すように大地に流れ、少年に沁み込むように打ち続けた。男はあの歓喜の朝のように、少年を抱きしめたかった。少年はあの初めての朝のように、抱きしめられたかった。でも、叶わなかった。少年にはわからなかった。どうしても。気づけば男はいなかった。あるのはその体だけ。男の最後の疑問は、少年に疑問を与えてくれた。何故？どうして？教えて？少年は懺悔した。それが疑問を持ってしまったことに対してなのか、男を殺してしまったことに対してなのかは少年にもわからなかった。少年は、二人きりで過ぎた部屋をあーあーと呻くものたちもろとも焼き払って、壊して潰した。そして、少年は目を瞑った。なんだか、とつても幸せなような気がした。

「…酷い夢だ。」

まだ朝日も昇り切らないような時間。青紫の部屋に、冷蔵庫の機械音がやけに響いている。冷蔵庫のことを意識したからか、喉の奥が嘔れているのに気が付いた。まだ若干の眠気は残っているものの、二度寝をする気にもなれなかったので、喉を潤しにかかった。

「うげ、眩しっ。」

暗闇に慣れた瞳に、冷蔵庫の光は酷く痛かった。軽く目を細めな

がら、お茶を探す。

「あれ、茶がねえ。…仕方ねえ、牛乳にすつか。」

寝起きに牛乳。コップに移すのも億劫で、そのまま飲み干す。まあ、普段からあまりコップは使わないけれど。一人暮らしだからこそ、出来ることではある。

牛乳のパック片手に、テレビをつけてみる。こんな早朝では、あまり自分が面白いと感じる番組はなさそうだ。1チャンネルずつ変えていき、一回見たことのないCMに目を奪われただけで、案の定面白いと感じるものはなく、テレビの電源を切る。牛乳を冷蔵庫に戻し、仕方がないから二度寝でも…と思えばベッドにダイブしてみたものの、いつもすぐに眠気をくれるはずの枕も布団も、今朝はまるで役には立ちそうもなかった。

そうしてベッドの上で天井を見上げながら、ふう。とそれらしく溜息をついてみたり。

「…知らない天井だ。」

いや、普通に知ってる天井です。ときどきくだらないネタに走ってみたりしながらぼーっとしていると、いつの間にか朝の日が差すくらいには明るくなってきたようだ。

そういえば今何時だろうか。

「確か枕の下に携帯が…っと！ふむ、5時ちよいか。」

二度寝するには微妙な時間だ。まあ、一向にその眠気とやらは襲って来ないわけだが。だからといって、出かける準備をするにはかなり早い時間でもある。どちらにしても、微妙な時間だと言っわけだ。

「ああ、億劫だ…。」

時間を潰すことでさえ億劫とは、これいかに。

暇である。と訴える体をつつ伏せに、最近気に入って買った、少し硬めの枕に顔を埋めると、全く来ないと思っていた眠気が一気にやってきた。

「…む、やば…ね、る…。」

おい、誰だ。寝る瞬間がわからないなんぞ言いやがったのは。

今度はもう少し、いい夢を見れたらいい。あと、遅刻しないように起きたらいい。というか、頼むから誰か起こしてくれ。などと、案外はつきりした思考の中、俺こと大野木雅人は爆睡中である。

本当に、誰か起こしてくれ。えっと、7時くらいに。

EPISODE・1 初めての朝、始まりの夜、いつもの朝（後書き）

はい、主人公です。口癖「億劫だ。」です。駄目人間……。かなり見切り発車なこの作品。あ、あとセミが網戸に止まってミンミン五月蠅いです。今度五月蠅くしたらツクツクホーシで対抗しようかと思えます。

EPISODE・2 重役出勤と大嫌いなモノ（前書き）

難しいですね、異能もの…書ける人、尊敬します。かなり時間が経ちましたが、こちらも時々更新したいです。

結構先の読める話かもしれませんが、どうぞよろしくお願いします。

E P I S O D E ・ 2 重役出勤と大嫌いなモノ

少しずつ、町が喧騒を帯びてきた頃。

深く眠る弟を、彼は：いいや、彼ではないか。いいや、彼でもあり、彼女でもあり、そのどちらでもないか。まあ、そんなことはどうでもいい。ここは便宜上 それ と呼ぶことにする。それは見つめていた。

それ はぼつりと呟く。毎日の日課であり、口癖のようなその呟きが、弟の雅人に届きはしないのだが、それでも それは呟く。

「力が。人間には過ぎた力よ、雅人。お前が望もうと、望まざろうと、世界はお前を愛してしまう。」

そして、それは それ にも言えた。人間のような繋がり兄弟ではないが、正しく雅人は それ の弟だった。愛さずには、いられまい。

愚かな、と思わなかったわけではない。だが、それは一部の、魂の底から愚かな人間のせいであって、雅人には何の罪もない。それは、人間が愚かで矮小な生き物だと知っていた。けれど、それが罪深いこととは思っていなかった。思う必要もなかったのだ。

「雅人、お前は愚かな私。力に溺れることもできず、力を憎むこともできず、力を腐らせることもできない、愚かな弟。」

雅人は人間にしては歪んでいて、 それ としては真っ直ぐすぎた。なんと愛しい、と「それ」は思う。雅人が雅人であるがまま、

そうして生きていることが嬉しい。

もぞり、と雅人が寝返りを打つ。ああ、もう起きる時間か。それは少し残念に思った。睡眠は、雅人の弱弱しさを見せつけてくれているようで、それは好きだったのだ。

「それではな、雅人。いつでも私は、お前に呼ばれるのを待っている。」

それは希望であり、願いであり、予言だった。いつか雅人はそれを呼ぶ。この手に雅人を抱く日が、必ず来ると。それは知っているからだ。

光ある場所には影が差す。そんなことは当たり前の話だ。だが、影しかない場所に光なんぞが現れるだろうか。答えは否。つまり、どんなに日の光が誰かの頭上に降り注いでも、カーテンを閉め切った上に布団の中で丸くなっていた俺に、その光の恩恵は当たらない！ということだ。…何を言いたいかということだな。

「9時。」

完全に遅刻である。

「…億劫だ。」

何が億劫って、何もかもがだ。

「仕方がない。準備するか。」

俺はこれでも高校二年生だ。ピチピチのティーンエイジャーなのだ。例え俺が、遅刻と知っていながら歩いて登校しても、『思春期特有の倦怠感』だと教師の皆々様方も快く許してくださるはずだ。

「バス…あつたかな。」

まあいい。急いだってどうにもならない。遅刻は遅刻。制服も適当に着崩して、家を出る。ゆっくり歩いていると、そっぴや今日は午後から実技があつたな…と思ひ出す。

実技。昔は体育、などと呼ばれていたようだが、今はそんなものはない。授業内容そのものが違うのだ。実技の授業はここ数年で一気に普及した、今の世の中で一番重要な科目である。俗に五教科と呼ばれる、国語・数学・英語・社会・理科よりも、実技・創造学・神学・自然学・世界語のほうがよく重視されている。何故か。その答えは簡単だ。人類の新たな可能性が、見つかったのだ。その名も、【T2・system】。詳しいことはよくわからないが、「世界の中にある事象、または幻想を人類に付加する」らしい。それで何が起るかというと、所謂【能力者】になるわけだ。発現する能力は個人で違い、強い能力の奴もいれば、それが何に役に立つのかわからないような能力の奴もいる。当然、そんな便利な能力が付加されても、使い方がわからなければ意味がない。そこで、ちゃんとした教育機関での授業が必要となった。その授業こそが、実技だ。

能力者であることが当たり前になった世界で、俺は生きている。もちろん、ここにいる以上俺も能力はあるわけだ。

「何故、と問いたい。何故、学園というものは小高い丘の上にあるのかと。何故!!」

叫んでも始まらない。そんなことは分かっている。でもなあ…この坂上るのはなあ…俺、慢性的に運動不足なんだよなあ…チャームポイントは運動不足と言ってもいいくらいなんだよなあ…いいわけないか。

「はあ…億劫だ。」

今すぐこの場でしゃがみ込みたい衝動を抑え、俺は重たい足を学園へと向けて進ませる。さてさて、到着するのはいつになることやら。あだ名『重役』とかになるかも。…あれ、なんかいいな。

「大野木雅人：今、何時やと思ってんねん…。」

「10時ですね。」

「ド阿呆っ！んな、当ったり前のことは聞いてへんわ！遅刻やゆーてんねんっ!!」

「初めて聞きました。」

「あかん…お前とは話にならへん。もうええ、はよ席座れ。」

「はい、そのつもりです。」

「しばくぞ?」

「…俺はどちらかと言えばSです。」

「…お前、後で職員室な。」

何故だ。

「今の会話の流れで、よーキョトンとした顔出来るなあ、おい。」

「褒めら、」

「褒めてへん。」

案の定怒られた。まあ当然か。運よく担任の授業の時間でよかった、と思うことにしようか。

先ほど俺にしばくぞ？と物騒なことを言っていたのが、このクラスの担任の三澤秋仁。担当教科は神学。似合わないなど言ってみる。殺されるぞ？神の名のもとに。本当に物騒な教師である。

窓際の前から五番目の席が、俺の定位置。よっこらせ、と若者が口にするもんじゃないランキング上位常連の掛け声で席に座る。すると、後ろから背中を突くやつがいた。

「…なんだよ。」

「今日は随分と遅かったな。『重役』って呼んでやるうか？」

「残念だったな。それはさっきやったんだ、多岐。」

「なにそれ。」

多岐朔夜。それがこいつの名前。入学当初から、何かと俺に関わってくる変な奴だ。少々騒がしいが、気さくでいい奴…ということにしておこう。顔は…端的に言うなら、敵だ。

「憎い。憎いぞ、多岐。」

「え、何。いつの間に俺恨まれてんの？」

ああ、そのスツと筋の通った鼻だけでもいいからくれ。いや、その目元のセクシー黒子だけでもいい。それがあるだけで、なんか変

われる気がする。…幻想か。

「おい、そのアホ二人。ええ加減にしいや。授業進まへんやるが。」

「ほーい！」

「…寝る。」

「ごらあ大野木い！教師目の前にして、堂々と寝る宣言する奴があるかい！」

「先生！完全に寝る体制です、こいつ。」

「はあああ！？」

その後も三澤先生は、何度か俺を怒鳴っていたようだが、最終的に諦めたようで普通に授業が始まった。

「神話つちゅーのにはな、神様だけが存在してるわけやない。神様と、…。」

俺はその声さえもシャットアウトする。ごめんな、先生。運よかつたとか言っただけでさ、前言撤回する。俺さ…

神様ってやつが、大っ嫌いなんだよ。

EPISODE・2 重役出勤と大嫌いなモノ（後書き）

三澤先生は丸めた新聞とか、ハリセンとか持ってそんなイメージです。でも神学。されど神学。

多岐君はイケメンです。モテます。でも軟派じゃないんです。ナチュラルにフラグへし折るタイプです。

E P I S O D E ・ 3 学園とわかってない奴ら

『異能教育第一機関』、通称『異能学園』。

世界中のあらゆる人物が、今やすべて『能力者』であるため、教育もまた変わらなければならなかった。この異能学園は、日本においてその最先端を行くトップ校であった。多くの子供たちに可能性を、をモットーに作られたこの学園は、能力の高さや強さに関係なくすべての子供を受け入れており、小中高一貫の今では生徒数5万人を超えるマンモス校である。

機関、と冠するだけあって異能に対する研究も幅広く行われ、学生を主体とした独創性の高い研究成果が出されているのも特徴だ。中には個人的な趣味に走っているものも多々、見られるのだが。

これだけの生徒数があれば、当然敷地も広い。学園都市、と呼んでも過言ではないだろう。学園の全容をすべて記憶しているのは、【完全記憶能力】とか【全容把握能力】だとかの数少ない者だけだろう。

前も言ったが、能力は個人で違う。自然の力を操るのや、今何時何分何秒なのかが時計を見なくてもわかるとか、ピンキリだ。だからこそ、研究する度合い・箇所・期間も違ってくる。異能学園では、それがクラス分けの基準になる。自然の力ならば「緑」、肉体に関する力ならば「赤」、物質系ならば「青」、芸術系ならば「黄」、技術系ならば「紫」といった具合に分けられる。まあ、他にも細かく分類されるが、ここは割愛しよう。そしてさらにレベル分けがされ、上はSまでで下はEまでだ。例えば、水の力が使える奴が二人いたとして、片方は津波を引き起こし、もう片方はスコールを引き起こすだけならば、どちらが強いかなど明白だ。つまり、前者はSで後者はE。こういった具合で、レベルが与えられる。レベルは一種のステータスではあるが、それが優秀である証明とは限らない。

あくまでレベルは危険度や希少度。レベルが高ければ高いほど、その能力は制限を受けることになるし、研究対象にもなりやすい。

「のだが…。」

はあ。それがわからん奴も、中にはいるらしい。悲しいことだ。

「どした、雅人。」

「…あれ。」

「ん？」

午前の授業が終わり　あの後ずっと寝ていたらしい　俺と多岐は食堂を目指していた。俺が示した方向には、この学園の白の制服の左肩から「青」のラインが五本入った男子生徒が一人と、同じく「青」が三本入ったのが二人。そして、おそらくそいつらに絡まれているであろう「緑」の一本ラインの少年がいた。「青」のラインのうち、一番ライン数が多いのがリーダー格だろうが、どう見ても三下だな。野次馬も集まり始めているし…。

「億劫だ。帰るぞ。」

「雅人！ちよつと見に行こうぜっ！」

「はあ！？ちよ、多岐、ひっぱんな！」

ちくしょう、このアホ！

アホに連れられて騒ぎの中心に近づくと、どうやら「緑」の少年がリーダー格の男にぶつかってしまったようだった。その程度で、と誰もが思うだろうが、結局いいカモだったのだらう。

「キミイ、僕は青組のAランカーなんだよ？このラインの数をみなよ。キミは見たところ、最低ランクのEじゃないか。EランクがA

ランクにぶつかっておいて、謝罪もないってどうなのさ!」

「だ、だから、先ほどからすみませんと何度も…。」

「誠意つてものがあるだろう? キミも知っているとは思うけど、僕はキミより強いんだよ? その気になれば、キミなんて簡単に潰せるんだ。僕の言ってること、わからないとは、言わないよね?」

土下座でもさせようってか? 悪趣味だねえ。後ろの二人もニヤニヤしてるし。そりゃ見た感じ、「緑」のほうは気弱そうな雰囲気だし、ラインから見てもたいしたことは出来ないだろう。野次馬して傍観してるだけの俺が言えることじゃないが、虫唾が走る。

「うつわ、悪趣味。あの「緑」っ子どうするかね?」

「さあ。土下座なりなんなりするんじゃないの。」

要求されれば呑むだろう。それはここにいる誰もが思っていたこと。AとEの差は、それほどに大きいものだからだ。ま、それが本物であるならば…なのだが。

野次馬は時間がたつたび多くなる。まして今は昼時。さて、言っている意味が分かるか? と問われた少年がいつ土下座をするのか、と思っっていたら。

「…わ、わかりません。」

「は?」

少年は小さな声だったが、はっきりわからないと答えた。つまり、土下座をする気はない、と言ったわけだ。

「うつそあ…。」

隣の多岐も、かなり驚いたようだ。もちろん俺や、他の野次馬も。

相手も、予想外すぎて目を丸くしている。だが、見たところ一番驚いているのは、発言した本人のようだ。顔がもはや、青を通り越して白だ。

そうしていると、相手のほうも落ち着いたようで、次には顔に怒りを滲ませた。

「自分が何言ってるか、わかってんのか！」
「う、わ。」

「青」の男の右手に魔法陣が光る。能力の発動。やばい、と誰もが思った。あのまま能力が施行されれば、「緑」の少年はただではすまない。そして、Aランクの攻撃の余波がこちらまで来ないとも限らない。場がパニックになる、その瞬間。

「何の騒ぎだ。」

静かな声が響いた。現れたのは、二人の女生徒。一人は、濡れ羽色の長く真っ直ぐな髪を白のリボンで高く結んだ、『高潔』そんな言葉がよく似合う美人。もう一人は、くすんだ灰色の髪を肩口で揃え、大きなヘッドホンを付けた眠たげで小柄な少女。二人とも、他の生徒とは違う黒の制服に身を包んでいる。ラインは「白」の六本線。

「生徒会…。」

誰かが呟いた。黒の制服に白の六本線は、生徒会の証。この学園にいる者なら誰もが知ること。濡れ羽の彼女の真っ直ぐ伸ばされた背筋や、射抜くような強い視線は、あまりにこの場においては浮きすぎていて、そして何より相応しかった。能力発動の一步手前で、思いもがけない人物に遭遇した「青」の男子生徒は、明らかに動揺

していた。理由は明白。

「学園内での能力発動は、授業などの監督官がいる場合のみ許可されている。まして、人に向けてなど言語道断だが？」

「い、いえ…僕はべ、別に…っ！こ、こいつがわ、わざとぶつかってきたから…！」

はい？うわ、事実を改変しやがった。ほら、副会長さんも眉間にしわ寄せちゃってんじゃないか。というか、墓穴掘ってんだろ。ぶつかってきただけで能力発動しようとしたのがバレバレだ。…馬鹿なのか？

「…発動を止める。今すぐその手を下し、即刻立ち去れ。後日話を聞くのでな、覚悟しておけ。」

「…っく。」

おお、おお。美人が怒ると怖いねえ。でもま、これで一応の收拾はついたわけだし、生徒会万歳ってことで。

生徒会に打ちのめされた「青」の奴らは、苛立ったように俺たち野次馬を押しつけ進む。ちょうど俺たちの目の前を通り過ぎる。…ふむ。虫唾が走ったのは本当だし、「緑」の少年も頑張ったしな。これは俺からのサービス。

「『底上げ』はルール違反だぜ？おにーさん。」

「…！」

男子生徒達は一瞬立ち止まり、その後逃げるようにして走り去った。ま、これで悪さは出来ないだろう。

なんとなくいいことをした気分になった俺は、そのままその身を
翻す。まさかこれがきっかけで、あの連中に付きまとわれること
になるなんてことは知りもしないで。過去の俺には一言言いたい。

「やめろ。後悔するぞ。」

と。

EPISODE・3 学園とわかってない奴ら(後書き)

生徒会登場。やっぱりなんといっても黒髪。

EPISODE・4 緑色の毒と関わりたくない予感(前書き)

続けて投稿。

EPISODE・4 緑色の毒と関わりたくない予感

ここは、先ほどの能力発動未遂の現場。野次馬はもうおらず、残されたのは生徒会の二人と、被害者であろう少年。

「やはり、わざとぶつかってきたという言葉は嘘だったか。」

「す、すみません…。」

「ああ、いや。君が悪いのではないのだから、謝る必要などない。それに、ぶつかっただけで能力を発動しようとしたことが問題だ。奴らは後日、こちらで処分を下すから安心するといい。」

「あ、ありがとうございます…っ！」

少年は一つ頭を下げると、軽い足取りで校舎へ向かった。それを見届けて、次は灰色の小柄な少女が声を掛ける。

「問題は、そこだけ、違う。」

「何？」

濡れ羽色の少女は訝しげに、そちらを見た。灰色の少女は、コテんと首をかしげて、

「『底上げ』」

とだけ言った。それだけで伝わるものがあるらしく、濡れ羽の少女は、一層顔を険しくした。

「本当か。」

「『底上げ』は、ルール違反、だって。」

「つまり、？聞いたのか？。誰だ？」

灰色の少女は、その問いに首を振る。わからない、ということだろう。

「でも、声、聴けば、わかる。」

不特定多数の声を聴くなど、誰が可能と思うだろう。しかし、ここは『異能学園』。そして彼女らは生徒会であり、六本線 S ランクの保持者。灰色の少女の能力ならば、それは造作もないことである。いや、多少は骨が折れる作業ではあるだろうが。

腹、減った。

さて、所変わってここは食堂。さっきの能力事件のせいで、昼飯の時間がずれ、一番混む時間帯になってしまった。案の定、席もろくに取れやしない。

「多岐、先に行ってる。どうせいつものだろ？」

「おう！任せませえ。」

多岐を席取り担当で、俺は飯担当。効率がすこぶるいいわけではないが、飯を片手にうるちよろすんのもいかなものかと。

「おばちゃん、A定食と激辛DX。」

「あいよっ!」

激辛DXは、この第二食堂名物の激辛料理だ。何が入っているのかわからないが、ラーメンどんぶりに並々注がれた汁は、マグマの如く煮え立っている。これを完食したのは、この学園でも数えるほどしかない。というか、俺はあいつしか知らない。そう、多岐の言ういつものやつってのは、この激辛DXなわけだ。こんなもん好き好んで食うやつは、あのアホしかいまい。好奇の目をひしひしと感じつつ、俺は多岐を探す。

「おい! 雅人、こつちこつち。」

「おー。って、あれ? お前…。」

「ど、どうも…。」

多岐と一緒にいたのは、先ほどまで騒ぎの中心にいた「緑」の少年だった。

「なんかきよろきよろしてたから、誘ってみた。」

「へー。」

そうして俺が多岐と会話していると、少年は縮こまってしまった。

「あ、あの、すみません。お邪魔してしまったようで…。」

「ああ、いいよ別に。お前も昼、まだなんだろ?」

「あ、はい。ここに来る途中で、あの人たちとぶつかってしまっ…。」

「災難だったな。」

「はい、まったくです。低能な…あつ。」

しまった、という顔をする少年は、意外と毒づくタイプなのか

しない。

「す、すみません…。」

なんと腰の低い毒舌キャラなんだ…。

「それより飯食おうぜ、飯！腹減った！俺の激辛DX！」

「ま、そうだな。ほれ、お前も食え。」

「は、はい。そうさせていただきます。…って、それ名物のやつですよね？よくそんな毒物みたいなものを口に運べますね…って、うわ、すみませんっ！」

なにこいつ。毒舌のレベルが半端ないよ。…素敵だ。

「よし、少年。友達になろう。」

「ええ！？今の流れで！？どうしたんです、Mですか！？」

「…俺はどちらかといえばSだ。」

あれ、これどっかで言った気が…。ま、いつか。

「俺はちよいM！」

「死ね。」

てめーにや聞いてねえ。

「俺は、大野木雅人。こっちは多岐朔夜。ま、好きに呼んでくれ。

二人ともラインの「紫」でわかるとおり、技術系能力で今二年。お前は？」

「あ、えっと、自然系能力の井田智樹…です。一年生です…。」

「へえ、後輩か。」

「は、はい。」

「よろしくな、智樹。」

「よろしく〜!」

「よろしくお願いします、雅人先輩、朔夜先輩。」

ふむ。たまにはこんなこともいいもんだ。友達百人出来るかな、なんてことは言わないが、気に入ったやつとはそれなりに仲良くしたいってものだ。

そんな感じにほのぼのしていた時だった。

「楽しそうだな。」

ほんの少し前に聞いた、凜とした声が耳に届く。振り向いたらいけない、そんなことをしたら絶対後悔する!と、本能が告げていた。だって、智樹も目えまん丸くしてるし、多岐は…。

「うお、なんだこの子!」

「激辛DX、好き、ちょうだい。」

「ちよ、いきなり膝の上に乗るでないよ。危ないだろう。ちゃんと乗りますよーって言うってから乗りなさい。」

「ごめん、ね。」

なんかちっこいのに絡まれてる。いや、懐かれてる…?そして、お前の言うべきことはそれじゃない。せ・い・ふ・く!制服を見る!それは…っ!

「生徒会の者だが、少し話がしたい。」

「だってよ、智樹。」

「え?お断りします。」

お前だろ、どう考えたってお前に用だろ。だってさっきの騒ぎ、お前じゃん。断るな。

「ああ、そちらの井田君にはもう聴取済みだ。よって、用があるのは彼じゃない。ちなみに、わかっているだろうが、そちらでうちの書記である時兼蘭とじゃれている彼でもない。」

「っ、つまり…?」

恐る恐る振り向くと、やはり先ほど見た濡れ羽色の美人さん。彼女は、事情を知らない第三者から見ればとっておきのいい笑顔で、俺の肩に手を置きながら言った。ポンツという軽い音からは想像だにできなかった重圧に、俺の心は悲鳴を上げる。

「用があるのは、君だよ。さて、まずは名前から聞こうか。」

無理！

EPISODE・4 緑色の毒と関わりたくない予感(後書き)

あれ、よく見りゃ黒髪さんの名前がががが。

EPISODE 5 呼び出しと自己紹介(前書き)

登場人物がどんどん増えてます…大変

EPISODE 5 呼び出しと自己紹介

「さて、君の名前は。」

「モブ男です。」

「ふざけているのか？」

「……………いえ、まったく？」

「……………」

「……………」

皆さん大変です。生徒会が絡んできています。俺は無実です。…
まあ、思い当たる節がないわけじゃないが。

「なんて億劫な…。」

「なんだって？」

「あ、はは。いえいえ、別に。というか、人の名前を聞くときは、
まず自分からとよく言いましたね？」

「ん？あー、それもそうだな。私の名前を知らないのも珍しいが…。」

自意識過剰なのでは？と言ったら怒るかな。怒るよな。

「生徒会副会長をしている。百目鬼玲子だ。よろしくな。」

ええ、知っていましたとも。やっぱり自意識過剰とかじゃなかったですね、よかったですよかったです。

「わー、素敵なお名前ですねえ。百目鬼ひゃくめくって初めて聞きました。かつこいいですねえ。やつぱり男としては、何気ないところにかつこよさを求めたくなるというか、あー、いやほんと羨ましい！あ、ちなみにこつちの緑組は、一年の井田智樹ですよ？副会長。そういえばさっき話したって言ってましたよね、失礼しました何度も。んで、こつちの紫は二年の多岐朔夜っていいいます。イケメンは名前もいいですね、ほんと嫌になりませんか？あ、副会長は美人ですもんね、そんなこと思わないですよ。すみません、なんか余計なこと言っただみたくて…おおっと！こんな時間だ！もう午後の授業始まりますね！そんじゃあ俺はこれで！」

「待て。」

作戦失敗のようです。そしてなんだが不機嫌にしてみましたようです。

「君、の、名前、は？」

そんなに区切って言わなくても…。

「黙秘権を行使しま、」

ピンポン

俺の言葉を遮り、校内放送の音が鳴る。食堂が一気に静まり返り、さすがの副会長もそちらに気を取られているようだ。

よし、この隙に！

『ゴラァ！！二年紫C組、大野木雅人オオ！！はよお、職員室来んかいボケェ！！忘れとったとは言わせへんぞおお！！』

ブチッ

「わーい……。」

忘れてましたよ、せんせー。ええ、ほんとビックリするくらいすつきり忘れていましたとも。

「早く行かねえと、御仕置きされるぞ？」

「多岐君、いかがわしい言い方はやめなさい。そして首を傾げるな、気持ち悪い。あー…億劫だ。」

「そういうことなら仕方がないな。また後で伺うことにしようか、二年紫組の大野木雅人君？」

「あ、ははは、はっはー…はい。」

最悪だ…っ！

「何ぶすつとしてんねん。」

「……………世界は無情に満ちているのですね。」

「え？何なん、風邪？」

三澤先生は、俺の発言が相当気持ち悪かったらしく、あの後すぐに解放された。こちらとしては、先生の微妙な気の使い方のほうが気持ち悪かったのだが。全く、こんなことなら呼び出す必要もなかったろうに。おかげで…

「お仕置きは終わったか？」

「…お陰様で。というか、オシオキジャナイデスホントニヤメテクダサイ。」

生徒会なんかには捕まってしまうんだ。

俺に用なんて、十中八九あの能力行使未遂のことだろう。いらん親切心など出さなければよかった、などと今更後悔しても遅いのは分かっているが、そう思わずにはいられない。目の前に堂々と立っている副会長の百目鬼玲子からは、どう考えても逃げ切れないような気がするし。

「で？俺に何か。」

わかっているのに、どうしても一縷の望みにかけてくなるのは仕方がないことじゃないだろうか。例えそれが全くの無意味で、無駄なことだとしても。白を切りとおせるわけもないが、少しぐらい余裕ぶったっていいだろう。余裕なんて、全然ないけどな。

「君は、昼時に起きた能力行使未遂の現場にいたな。」

断言ですか。

「ええ、野次馬ですけど。」

まあ、嘘をつく必要もあるまい。事実、俺はただの野次馬だった。

「逃げ去る三人に、君が『底上げはルール違反だ』と囁いたとか。」

なるほど、誰か？聴けた？のか。

「さて、どうだったかな。」

これ、ほとんど尋問じゃないか。面倒事はごめんだとばかりに、俺は肩を竦める。

「生徒会書記、時兼蘭が君の声を聴いている。Sランクの『覚サトリ』が、聴き間違えることなどないとは思わないか。」

じつと副会長が俺を見つめる。俺の一挙一動、どんな細かいところでも見逃さないように。そうか、？聴けた？のはあのちみっこいのだったか。だからヘッドホンなんだな。

これ以上抵抗しても、不利になるだけか。巻き込まれるのも拒否だが、敵視されるのもっと拒否したいところだし…。

「はあ、降参だよ副会長。」

俺は両手を上にあげて、溜息をつく。かすかに、目の前の彼女の口角が上がったのを見た。

「さ、詳しいことを聞こうか。」
「へーい…。」

連れてこられたのは、当然生徒会室。縁のない場所だと思っていたが、まさかこんな形で入ることになるとは。今この場にいるのは、四人。お馴染みの副会長と書記、俺と、それから…

「まあまあ、慌てても仕方ないよ玲子。彼は容疑者じゃないんだから。ね？大野木君。」

爽やか王子と評判の生徒会長、香坂悟。俺は、この爽やかと言われる笑顔がどうしても胡散臭く見えて仕方がない。絶対腹黒い。

「ま、とりあえず自己紹介をば。二年紫C組、大野木雅人。身長183?、体重は76?、スリーサイズは秘密ってことで。あ、視力は両目とも2.0。得意科目は情報。苦手なのは、神学。好き嫌いはなし。あ、でもあれはダメ。えっと、果肉入りの飲み物。あの粒々が流れ込んでくるのが無理なんだよねえ。そんで、」

「おい。」

堪え性がないね、副会長。ちらり、と生徒会長を見ると面白いものを見るような目をしてる。なんか、気が合いそうだね俺たち。そして視線を副会長に戻すと、少し口角を上げて言っちゃった。

「そして、能力は『解析』。」

EPISODE・6 その理由と協力要請（前書き）

『異能学園』、風来る。

EPISODE・6 その理由と協力要請

「なるほど。大野木君は『解析能力』の持ち主だったんだね。」

さも、納得しました！という感じの香坂生徒会長。でも、普通ならこんなこと簡単に調べられたはず。

「知ってたんじゃないの？生徒会長。」

「おや、ばれてたのかい？」

「まあね。」

香坂生徒会長は、俺の発言を受けてその笑みを一層深くした。濃い瞳の光は、俺の全てを見定めようとしているようで、酷く居心地が悪い。今となっては、胡散臭いと思っていた笑顔も不気味なだけだ。俺が眉を顰めても、顔色一つ変えやしない。

「か、会長…？」

この空気に耐えられなかったのだろう。副会長が恐々と発言する。会長はその声に一度目を瞑ると、次にはいつもの胡散臭い笑顔に戻っていた。

「うーん、やっぱり玲子に連れてきてもらって正解だったね。まさか、こんな面白そうな子だとは思わなかったなあ。」

「会長は、知っていらしたのですか？」

「俺はこれでも、生徒会長だからねえ。生徒の簡単な情報くらいは、

すぐに手に入れられるよ。」
「さ、流石ですね…。」

何が流石だ。つまりは、俺のことなど初めから知っているにもかかわらず、俺を呼んだ理由があるってことだろ？それも、なんとなく面倒くさい感じの。

この生徒会長は、俺が目立つのを嫌っているのも何となく感じていたのだろ。だから、俺を呼んでくる役に百目鬼玲子を選らんだ。真面目・堅物・優等生。俺が最も苦手とする人物像であり、彼女がまさにそれだ。彼女が一番厄介なところは、任務遂行に躍起になるということだ。俺が彼女から逃げれば逃げるほど、彼女は俺を追うだろ。すべては【大野木雅人を連れてこい】という任務のためにそれは困る。学園中を生徒会副会長に追われながら駆け回る男子生徒。目立つ！悪目立ちすぎる！というか、それをする体力も気力も根性もない。だから、俺は百目鬼玲子を目の前に出された時点で、諦めて連行されるという選択をせざるを得なかった。

生徒会書記の時兼蘭ならばどうだろ。ま、論外だろうな。彼女は基本的に、動くタイプではない。俺を連れてこいと言われても、俺が嫌だと言えはわかったとすぐに手を引いてしまはずだ。逆に香坂悟が俺の目の前に来たなら、俺の警戒心はMaxだろう。いや、その前に香坂生徒会長自体が目立ちすぎて俺の不快感がMaxか。いずれにせよ、俺が大人しくこの場に来る可能性は、百目鬼副会長に比べればかなり低かったであろう。

まったく小癪な御仁である。それぞれの特性と、その特性が一番発揮される部分を心得ている、ということか。自分自身をも自分が動かす駒の一つとして考えられる者ほど、面倒で厄介なものもない。現に俺はこの場において、もう逃げられないのだろ。うなと思ってる。ある程度の条件は付けられるだろ。うが、それらはすべて譲歩して妥協した結果。そもそも俺は、何もしたくないのだから。ああ、億劫だ。

「『解析』、触らないと、ダメ。」

ふと、今まで隅のほうで静かにしていた時兼蘭書記が口を出す。ある程度の意味は分かるが、どうにも分かり辛いと思ってしまうのは仕方ないことではないだろうか。

「ふむ。そう言われてみればそうだな。」

「そうだねえ。」

生徒会組にはわかるらしい。これが付き合いの差か。すると、副会長が書記の代弁をするように俺に問うた。

「大野木、お前の能力は『解析』で間違いないのだろう？ならば、どうやって『解析』している。基本的に『解析』や『変換』などの技術系能力は、触れなければ行使できないはずだ。しかし、私たちはあの場で彼らに触れたものなど見ていない。」

「ああ、そのことが。」

触れてもいないのに何故、俺が『解析』出来たのか。その答えを求め、じつと見つめる瞳が二対。先ほどと変わらぬ、楽しそうな瞳が二対。いや

「さっき自己紹介でも言ったでしょ、両目とも2・0だって。目、いいんだ。」

二対。ほーんと、変なところ気が合うよね、俺たち。

一 応理由を言ってみたものの、まだ少し納得がいていないようだ。特に、？聴こえる？彼女は。けれど、じっと見つめてくる視線に敵視や警戒の色がないから、ただ単に興味や疑問程度の感情なのだろう。しかし、こちらとしては冷や汗ものだ。興味や疑問は、突き詰めれば突き詰めるほどに疑念や敵対を生みやすい。すつきり解決！なんて、世の中そうそう上手く作られてやしない。少なくとも俺はそれを信じるに値する出来事に遭遇していない。俺が経験したすべては、どれも俺に敵対心や疑心暗鬼を覚えさせるだけだった。どうしたものか、と考えているとふっと時兼が視線を外した。恐らく飽きたのだろう。飽きやすい性格を、こんなありがたいと思ったのは初めての経験である。

「目、ねえ。大野木君は技術系の中でも珍しいタイプなのかな？」

香坂生徒会長が、顔の前で手を組みながら質問してくる。

「ええ、まあ。調査結果によると、視覚したものをデータ化して脳で判断するのが、俺の『解析』なんだそうで。」

「では、瞳自体がスキャン能力を有していて、その処理を脳でしているのか。」

案外物分りのいい副会長である。やはり、お堅いだけではダメなのだろうか。ああ、いつだったか、「副会長は文武両道！才色兼備！」と声高に叫んでいた奴がいたから、きつと元来の頭の良さがここで発揮されたのだろう。

「そのとおり。だから、直接脳に情報を送る他の『解析』よりも、脳への負荷が少なく、迅速な解析が可能なわけです。」
「なるほど。」

人とは、ある程度納得のいく情報が提示されると、それが真実であると勝手に想像し享受する生き物だ。それがたとえ、多面体の一角だけしか見えていない状態でも、その一角こそが多面体と思いつむ。とはいえ、何が真実であり何が真実でないかなど、誰にもわかるはずもないのだが。俺が何を言いたいのかということ、まあつまりなんだ、これ以上深入りされなくてよかったな、ということだ。
『解析』については、必要最低限の情報は与えたわけで、嘘はないけど、下手なことを言って首を突っ込まれでもしたら、必死になってこの能力を手に入れた意味がない。適当な距離感で付き合うべきなのだ、何事とも。

「さて、君の能力や君の人となりを見込んで、少々頼みごとを聞いてくれるかな？」

来たぜ、ぬるりと。
「というか急過ぎだ、生徒会長。もう少し心の準備をさせる。思いっきり油断してたわ！」

「なんででしょうか。」

油断していた故に生じた動揺をささぬよう、平静を保つふりをして返事する。

「うん、君が一番の証人だと思うけど、今日の昼間に起きた能力発動未遂の件。被害者、というほどではないのだろうけど、井田智樹君を能力行使の対象にしたあの三人組。彼らへの事情聴取で、三人とも『底上げ』の事実は認めた。君に『底上げはルール違反』と言われていたから、初めから観念していたんだろうね。けど、そこで問題が発生した。」

「問題？」

『底上げ』を加害者側が認めたのに、何が問題なんだ。

香坂生徒会長は、軽く息を吐くと、真っ直ぐ俺を見据えて言った。

「君以外の『解析』能力者では、彼らの『底上げ』を感知出来なかつたんだよ。」

「はい？」

「だからね？君以外は…」

「ああ、いい。わかってる。あんたの言葉の意味はわかってる。でも言いたいことの意味は、理解したくない。」

何故だ。何でそんな事態になっている。だって、『底上げ』は何らかの機器を身に着けたり、ものによっては植えつけたりすることによって、強制的に能力を引き上げる行為だ。『底上げ』機器を身に着けていれば身体検査で一目瞭然だし、もし植えつけるタイプのものでも『解析』能力があれば一発でわかるはずだ。わかる、はずなのに。

俺の理解は限界を超えていた。もしかしたら、という可能性が浮かんでは消え、浮かんでは消え、そしてそれしかないのではないかという結論に達してしまう。認めたくはない。だが、それが一番しっくりくる答えなのも確か。馬鹿げている話だが、実現不可能ではないのが恐ろしい。そうしていると、自然と声が漏れていた。

「……………能力自体に介入しているの、か？」

「まさか！そんなことが可能なのか！？」

「わからない。だが……………」

俺だって、副会長のようにまさか、と思っていたいさ。でも、考えれば考えるほど能力自体に細工をしたとしか思えない。もしそうなら俺にだけ解析できたのも頷ける。俺の瞳がスキャンするのは何も人体や無機物だけではない。個人の持つ、『能力の資質』をも？視てしまう？のだから。

あの時あの現場で、俺は何も『底上げ』を感知したわけではなかった。『解析』した奴らの『資質』に対してのランクが異常に高かったから、『底上げ』しているのだと推測したまでだ。このことを知るまで、俺は奴らの体に機器の存在を感知しなかったから、どこか隠れた場所に着けているのだろうと高をくくっていたのだが…こんな厄介な出来事に巻き込まれるなんて。

「大野木君。もう一つ、言っておかなければならないことがある。」

俺が思考の海に吞まれていると、香坂生徒会長は少し重い口調で新しい情報をくれた。それは俺にとって、いや……………この学園にとつてあまり喜べる内容ではなかった。

「彼ら三人は今、酷い昏睡状態にある。」

一抜けた！なーんて、言える空気ではないなあ。

学園の嵐に気づいてしまったのは、幸か不幸か。まあなんにせよ、俺が働くのは決定事項のようです。

EPISODE・6 その理由と協力要請（後書き）

雅人、出勤？

今回、自分で読み返してて「ややこしい、だと…っ！？」と思いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3546v/>

原初の弟

2011年12月1日00時57分発行